

実戦テスト

単語番号 1~16

二次
コード

ひと目見て手紙を届けて結婚へ

俵^{たわらの}藤太^{ぢやうた}という男性が、恋の病にかかった。心配した侍女が事情を聞くと、彼は次のように答えた。「俵藤太物語」の一節である。

「いっぞや御前へ参りし、御局の簾^{れんぢぢ}中より、見出されたる上臈^{じやうろう}の御立ち姿を一目見しより、恋の病となり、生死さだめぬ我が身のふぜい……（「いっぞだつたか殿の前に参上した時に、お部屋の間から、外を御覧になっていた身分の高い女房の立っているお姿をひと目見た時から、恋の病になって、生死もわからない我が身のありさまとなってしまい……）」

恋の病の原因は「垣間見^{かひまみ}」だという。多くは垣根越しにちらっと女性を見ることを指すが、簾^{かき}のすき間から見ても「垣間見」である。平安貴族の女性は人前に出ることがめつたになかったので、男性たちにとっては、偶然の垣間見が素晴らしい女性を見つけるチャンスなのである。

この話を聞いた侍女は、お手紙をお書きください、私がお届けしましょう、と言う。こうした「恋文」のチェックポイントは、「手紙の文字と添えられている和歌の上手さ」であるが、仲介する侍女の手際も大切になる。

次に、男性が初めて女性の家で一夜を過ごした翌朝の場面を取り上げよう。ここでも「文」が活躍する。男性は早朝の暗いうちに女性の家を出る。つらい別れであり、家に戻った男性はすぐに恋文を送る。これを「後朝の文^{ごあさのふみ}」という。「一晚を一緒に過ごしたあとは、ますます君のことが好きになった。こんな初めてのだよ、今夜も必ず行くよ。二人の愛は永遠だ」、ざっとこんな感じの内容が多い。もちろん女性もすぐに返事をするのである。

初めての夜から、男性は三夜続けて女性のもとに通う。三夜連続して通うことで、結婚が成立するのである。二人で餅を食べる「三日夜の餅^{かよよのもち}」の儀式、婿と女の親族との宴にあたる「所頭^{ところあたま}」を経て、二人はめでたく夫婦となる。